



積分の記号の研究

鈴木 啓一、山形県



自己紹介

現住所 山形県
年齢 67歳
学歴 新潟大学理学部数学科
職業 会社員→定年
研究分野 解析学・複素関数論
ホームページ 「こだわりハウス」 <http://szkkei.main.jp/>
「こだわりハウス」> 自作の数学

$$\text{例: } \int ydx + \int xdy = xy + C$$

$e^{i\pi} = -1$ の幾何的解釈

$$a + bi + cj + dij = \|Z\| e^{i\theta_i + j\theta_j + ij\theta_{ij}}$$

マイナス微分

「こだわりハウス」>リンク集>数学の参考文献
さまざま原書のリンクあり



発表の概要

- 1 $\int_a^b f(x) dx$ の意味は $\int_a^b (f(x) \times dx)$ なので dx は微小差、一方、不定積分において dx の x を積分変数と呼ぶことの妥当性
- 2 「ライプニッツは Summa (和) の頭文字 S を縦に伸ばして、積分の記号を \int とした」の信憑性
- 3 「ライプニッツは \int を使う前は \sum を使った」の信憑性

1 積分変数と呼ぶことの妥当性 ライプニッツの功績の考察



ライプニッツ著作集2 (P213) 1676/7 逆接線法	考察
$\frac{d\bar{x}}{d\bar{y}} \sqcap \frac{n}{y-x}$ $d\bar{x}y - xd\bar{x} \sqcap d\bar{y}n$ $\int d\bar{x}y - \int xd\bar{x} \sqcap n \int d\bar{y}$ <p>.....</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● $\frac{d\bar{x}}{d\bar{y}} \sqcap \frac{n}{y-x}$ の両辺に $d\bar{y}(y-x)$ を掛けると、 $d\bar{x}y - xd\bar{x} \sqcap d\bar{y}n \iff d\bar{x} \times y - x \times d\bar{x} \sqcap d\bar{y} \times n$ 差分 $(d\bar{x}y - xd\bar{x})$ の総和と、差分 $(d\bar{y}n)$ の総和も等しい。 $\int d\bar{x}y - \int xd\bar{x} \sqcap n \int d\bar{y} \iff \int (d\bar{x} \times y) - \int (x \times d\bar{x}) \sqcap n \times \int d\bar{y}$ ● 不可分法により、$d\bar{x} \times y$ とは「線分の太さ × 線分の長さ」 ● $\int d\bar{x}y$ とは $\int yd\bar{x}$ のことである。交換法則が成立つ。 ● 文献には、式のための記載で \int と d との組合せの説明はない。



1 積分変数と呼ぶことの妥当性 ライプニッツの功績の考察

ライプニッツ著作集2(PP.37-38) 1695 年

ライプニッツは「微分計算と積分計算が逆である」と考えたことが記載されている。

$$B_1C_1 + D_2C_2 + D_3C_3 + D_4C_4 = B_4C_4 = y$$

微分(微小差) dy の積分(総和)が y となるので、

$$\int dy = y \text{ が成り立つ。}$$

y の間の微分の積分は y 自身に戻る」と記載されている。

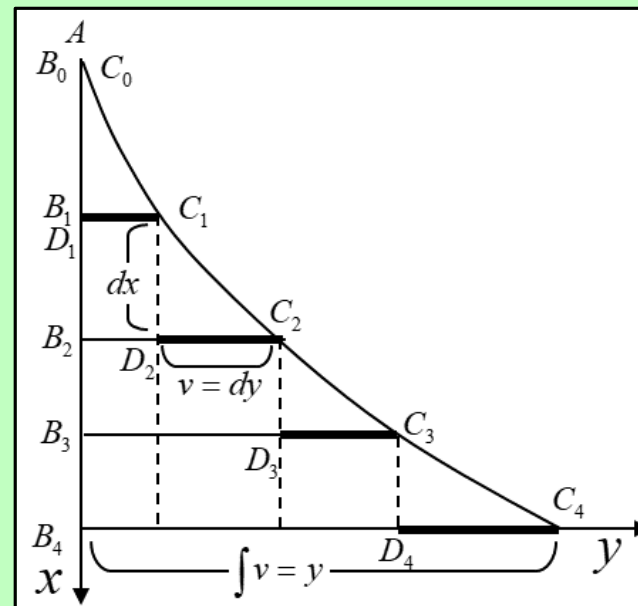
「微分の逆演算」という性質を発見している。

(注: 図については、一部変更している。)

例: B_2C_2 をライプニッツは ${}_2B_2C$ とした。)

現代風に表記すると、 $\int \frac{dy}{dx} dx = y$ のことである。

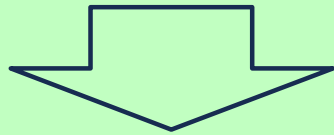
1676/7 dx : 線分の太さ \Rightarrow 1695 dx : 線分の間隔





1 積分変数と呼ぶことの妥当性 ライプニッツの考え方の総括

- $d\bar{x}y - x d\bar{x} \sqcap d\bar{y}n$
 $\int d\bar{x}y - \int x d\bar{x} \sqcap n \int d\bar{y}$
式のみが記載されていて、式の変換の説明はない。
「 \int と d との組み合わせの由来」は記載されていない。
- 「微分計算と積分計算が逆である」の説明
ライプニッツ著作集2(PP.37-38) 1695年微分と積分との関係
2ページを使って説明している。



ライプニッツは、一般関数の積分の計算方法が「微分の逆演算」ということを重要視したと考えられる。

1 積分変数と呼ぶことの妥当性

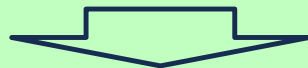
高校で扱う積分の考察



記号	$\lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^n f(x_i) \Delta x$	$\int_a^b f(x) dx$
	区分求積法	

区分求積法 $\lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n f(x_i) \Delta x$ について

作られた時期	ライプニッツ没後の約140年後、1854年リーマンの論文
当時の問題点	フーリエ係数 $\frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \cos nxdx, \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \sin nxdx$ が存在するかどうか？
理由・目的	積分値が存在するための必要十分条件を証明するため。



「区分求積法で計算しなさい」とは記載されていない。

区分求積法による計算方法は、計算練習としてはいいが、歴史的には要求されていない。

1 積分変数と呼ぶことの妥当性

大学で扱う積分の考察



大学で扱う積分の種類

名称	記号
重積分	$\int_a^b \int_c^d f(x, y) dx dy$
線積分	$\int_C f dx_i$
面積分	$\int_S f dS$
複素積分	$\int_C f(z) dz$
ベクトル関数の積分	$\int_a^b \mathbf{A}(t) dt$

区分求積法で定義されていて、リーマン積分とよばれる。

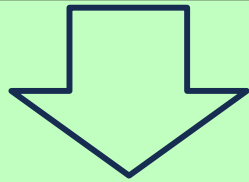
具体的な関数の積分の計算方法は、変数を置き換え
(置換積分等)し微分の逆演算をする方法である。
特に複素関数の場合、留数による計算方法もある。

区分求積法による計算はしない。



1 積分変数と呼ぶことの妥当性

ライプニッツの功績・高校で扱う積分・大学で扱う積分より、
積分の記号の由来より、微分の逆演算と扱うことが重要



演算記号という観点から $\int_a^b f(x) dx$ を言葉でいうと「 $f(x)$ を x で積分する」となる。

dx の x を積分変数と呼ぶことは妥当



2 「ライプニッツはsumma(和)の頭文字Sを縦に伸ばして積分記号 \int とした」の信憑性

ライプニッツ著作集2 (P.165)

「この箇所では数学史上初めて \int が導入された。これはラテン語 summa(和)の頭文字Sの当時用いられていた書体である」と解説が記載されている。

この信憑性を調査する。

2 「ライプニッツはsumma(和)の頭文字Sを縦に伸ばして積分記号 \int とした」の信憑性



ライプニッツ(1646-1716)の原書を調査

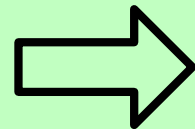
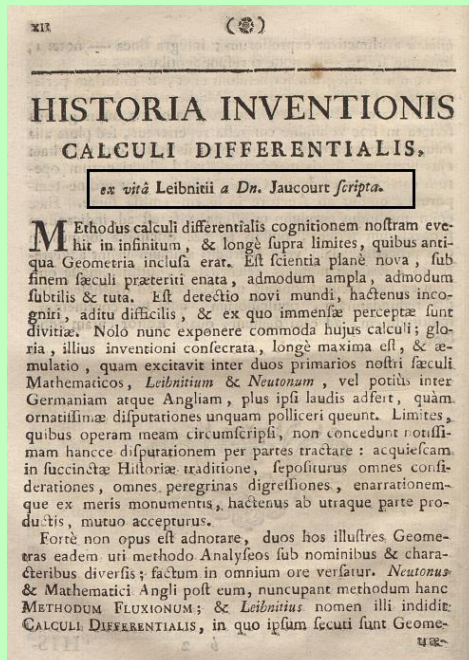
Universidad de Valladolid (バリアドリッド大学)

Gothofredi Guillelmi Leibnitii...Opera omnia (ライプニッツ作品集、ラテン語)

<https://uvadoc.uva.es/handle/10324/43555>

https://uvadoc.uva.es/bitstream/handle/10324/43555/SC_05909.pdf?sequence=1&isAllowed=y

序文VIIページ



ex vitâ Leibnitii a Dn. Jaucourt scripta.

英語では「script」に相当すると考えられる。

2 「ライプニッツはsumma (和)の頭文字Sを縦に伸ばして積分記号 \int とした」 の信憑性



ヨハンベルヌイ(1667-1748)の原書を調査

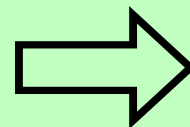
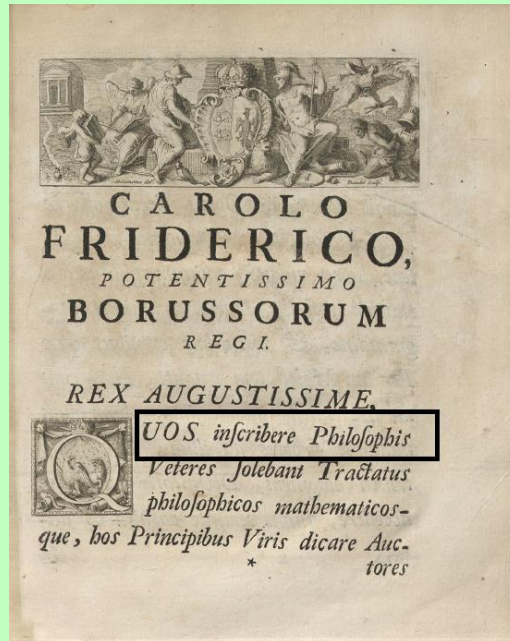
Universidad de Valladolid (バリャドリッド大学)

Jahannis Bernoulli Opera Omnia Tomus Primus (ヨハンベルヌイ作品集1、ラテン語)

<https://uvadoc.uva.es/handle/10324/49380>

https://uvadoc.uva.es/bitstream/handle/10324/49380/SC_07280.pdf?sequence=1&isAllowed=y

IページのEpistola(手紙)



UOS inscribere Philosophis

英語では「inscribe」「philosophic」に相当すると
考えられる。

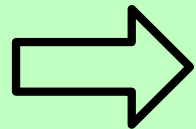
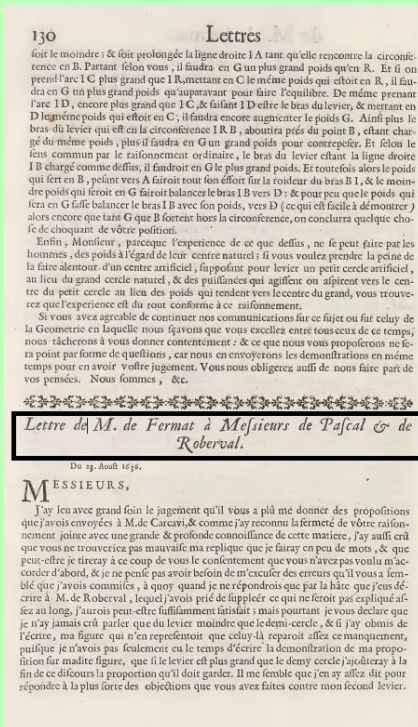
2 「ライプニッツはsumma(和)の頭文字Sを縦に伸ばして積分記号∫とした」の信憑性



フェルマー(1601-1665)の原書を調査

Varia Opera Mathematica Petris de Fermat (フェルマーの「さまざま数学」、フランス語)
<https://archive.org/0/items/variaoperamathe00ferm/variaoperamathe00ferm.pdf>

130ページのLettres(手紙)



Lettre de M. de Fermat à Messieurs de Pascal & de Roberval.

明らかに「Pascal」のことである。

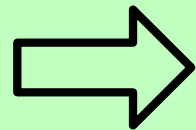
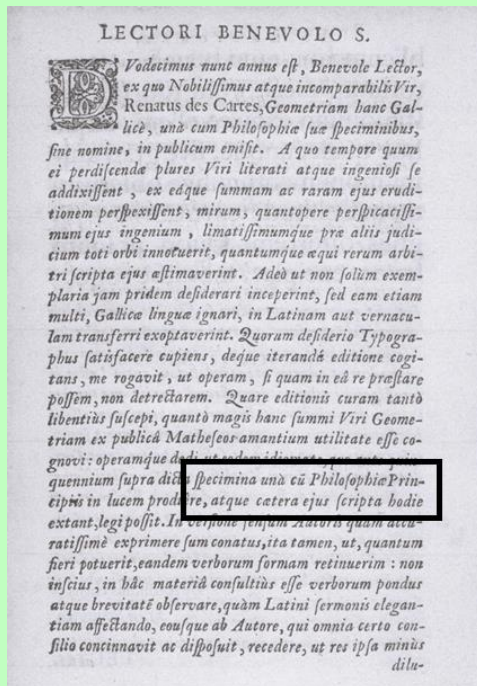
2 「ライプニッツはsumma(和)の頭文字Sを縦に伸ばして積分記号 \int とした」 の信憑性



デカルト(1596-1650)の原書を調査

Geometria a Renato Des Cartes anno 1637(デカルトの方法序説(幾何学)、ラテン語)
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8601510z/>

Lectori Benevolo S
(親愛なる読者の皆様)



*Specimina unà cū Philosophiæ Prin-
cipiis, atque cætera ejus scripta hodie*

英語では「philosophy」「script」に相当すると考えられる。

2 「ライプニッツはsumma(和)の頭文字Sを縦に伸ばして積分記号 \int とした」 の信憑性

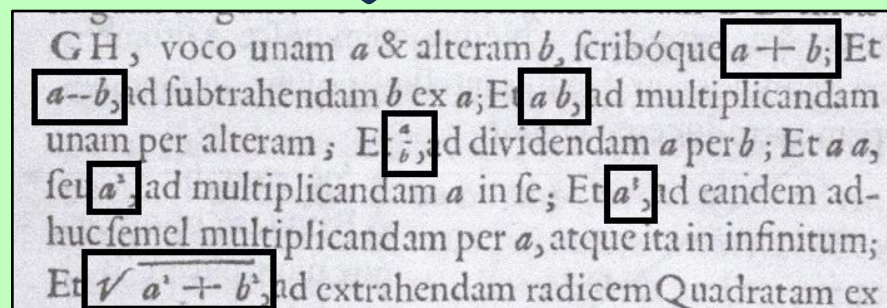
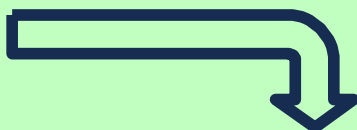
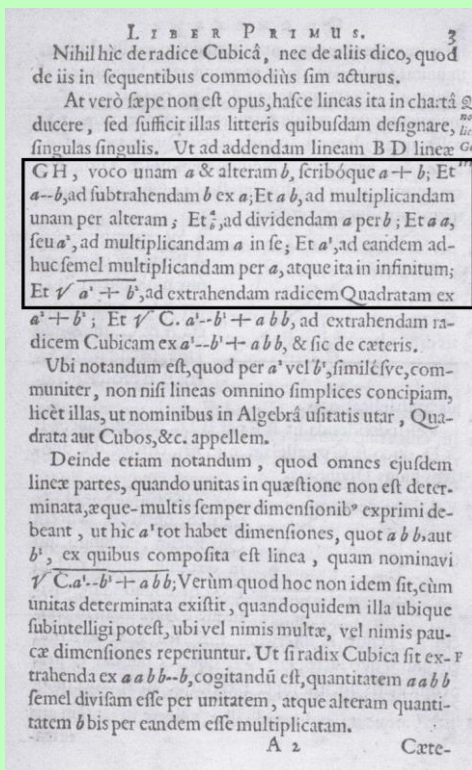


デカルト(1596-1650)の原書を調査

Geometria a Renato Des Cartes anno 1637(デカルトの方法序説(幾何学)、ラテン語)

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8601510z/>

3ページ



$$a + b, a - b$$

$$ab, \frac{a}{b}, a^2, a^3$$

$$\sqrt{a^2 + b^2}$$

掛算記号 \times が省略されている。

⇒ ライプニッツは、この記法を継承し、積分の記号で \times を省略したと考えられる。

2 「ライプニッツはsumma(和)の頭文字Sを縦に伸ばして積分記号 \int とした」 の信憑性

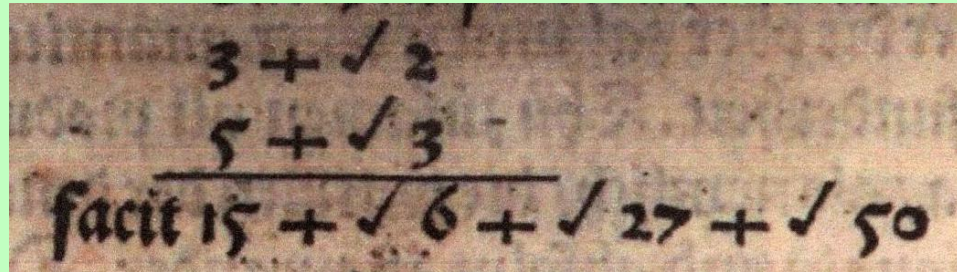
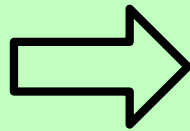
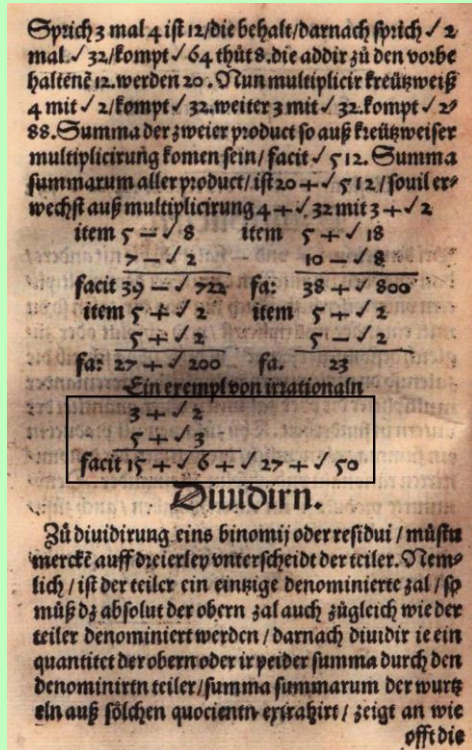


クリストフ・ルドルフ(1499-1543)の原書を調査(デカルトの時代から100年前)

Behend vnnd Hubsch Rechnung durch die kunstreichen regeln Algebre so gemeinlicklich die Coss Genent werden
(ルドルフ、代数の巧みな計算、ドイツ語)

<https://www.digitale-sammlungen.de/de/view/bsb11267680?page=1>

46ページ



$$(3 + \sqrt{2})(5 + \sqrt{3}) = 15 + \sqrt{6} + \sqrt{27} + \sqrt{50}$$

四則演算記号、加法(+) \cdot 減法(—) \cdot 除法(分数) \cdot 平方根($\sqrt{\quad}$)が記載されていた。ただし、乗法(\times)の記号はなかった。最初に $\sqrt{\quad}$ を使った人がルドルフ?

\Rightarrow

デカルトは、変数による四則演算を創出したと考えられる。

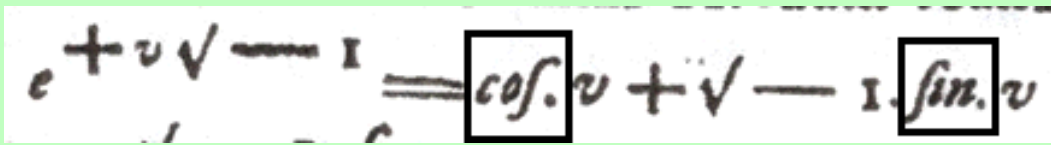
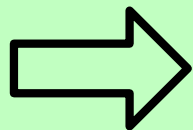
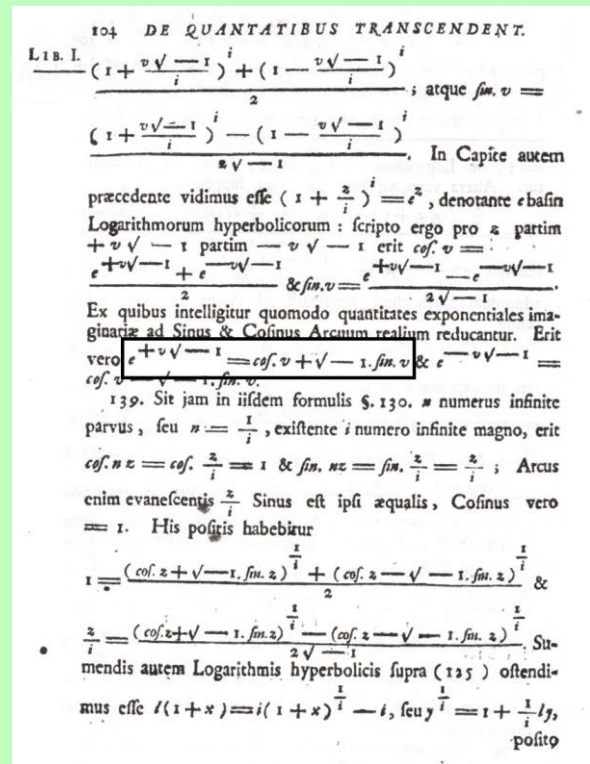
2 「ライプニッツはsumma(和)の頭文字Sを縦に伸ばして積分記号 \int とした」 の信憑性



オイラー(1707-1783)の原書を調査

Introductio in analysin infinitorum volume 1 (無限解析序説第1巻、ラテン語)
<https://scholarlycommons.pacific.edu/euler-works/101/>

104ページ



オイラーの公式 $e^{v\sqrt{-1}} = \cos v + \sqrt{-1} \sin v$ です。
 Cos のs、Sinのsが縦に伸ばされています。



2 「ライプニッツはsumma(和)の頭文字Sを縦に伸ばして
積分記号 \int とした」の信憑性

ライプニッツは、慣習にしたがってSを \int にした。
 \int はライプニッツの特別な創作ではない。

3 「ライプニッツは \int を使う前は Σ を使った」の信憑性



タイトルの理由

中村幸四郎(1999,P.212)

近世数学の歴史

いま, 数列 a, b, \dots, z までの項の数が x であるとき

$$1+1+\dots+1=x$$

$$1+2+3+\dots=\Sigma x$$

$$1+1+2+1+2+3+\dots=\Sigma\Sigma x \quad \text{等}$$

とおけば

$$a=x\cdot da-\Sigma x\cdot d^2a+\Sigma\Sigma x\cdot d^3a-\Sigma^3 x\cdot d^4a \quad (3)$$

ライプニッツは「歴史と起源」では Σ を和の記号 \int で表わし、 $\Sigma x,$

$\Sigma\Sigma x, \Sigma^3 x$ の代りにそれぞれ

$$\int x, \quad \int\int x, \quad \int^3 x$$

を使っています. このようにするとき (3) に対応して

$$a-\omega=x\cdot da-\int x\cdot d^2a+\int\int x\cdot d^3a-\int^3 x\cdot d^4a+\text{etc.} \quad (4)$$

ここで ω は最終項の意味です. またこの等式から, 容易に次の式が導かれ

Gottfried Wilhelm Leibniz(1999,P.314)

ライプニッツ著作集3

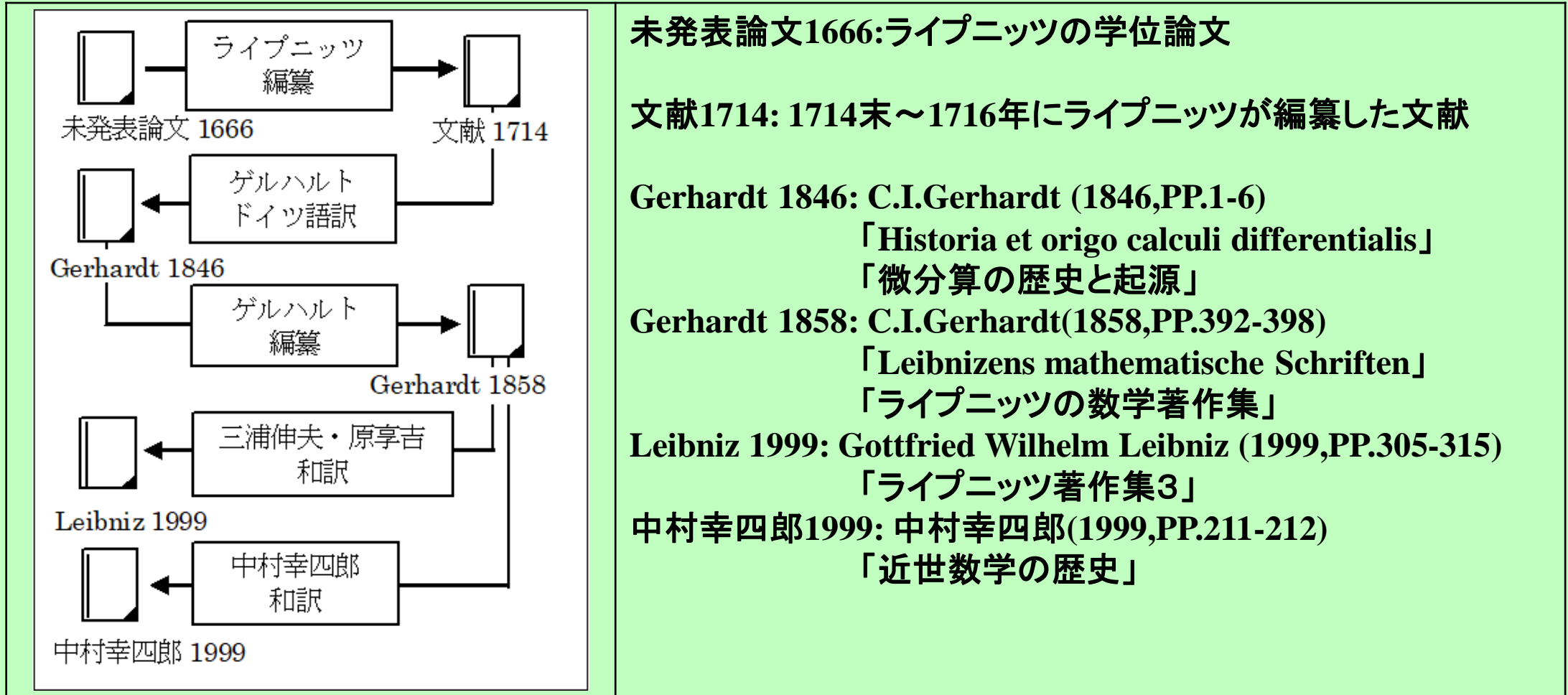
記号 d, \int は作っても Δ, Σ に相当する記号は持たず、「微

分」「積分」おも diffesentia, summa と呼び続けようとした
ライプニッツの「こだわり」を見るのは、誤りであろうか。

3 「ライプニッツは \int を使う前は Σ を使った」の信憑性



「歴史と起源」の引用フロー



未発表論文1666:ライプニッツの学位論文

文献1714: 1714末～1716年にライプニッツが編纂した文献

Gerhardt 1846: C.I.Gerhardt (1846,PP.1-6)

「Historia et origo calculi differentialis」

「微分算の歴史と起源」

Gerhardt 1858: C.I.Gerhardt(1858,PP.392-398)

「Leibnizens mathematische Schriften」

「ライプニッツの数学著作集」

Leibniz 1999: Gottfried Wilhelm Leibniz (1999,PP.305-315)

「ライプニッツ著作集3」

中村幸四郎1999: 中村幸四郎(1999,PP.211-212)

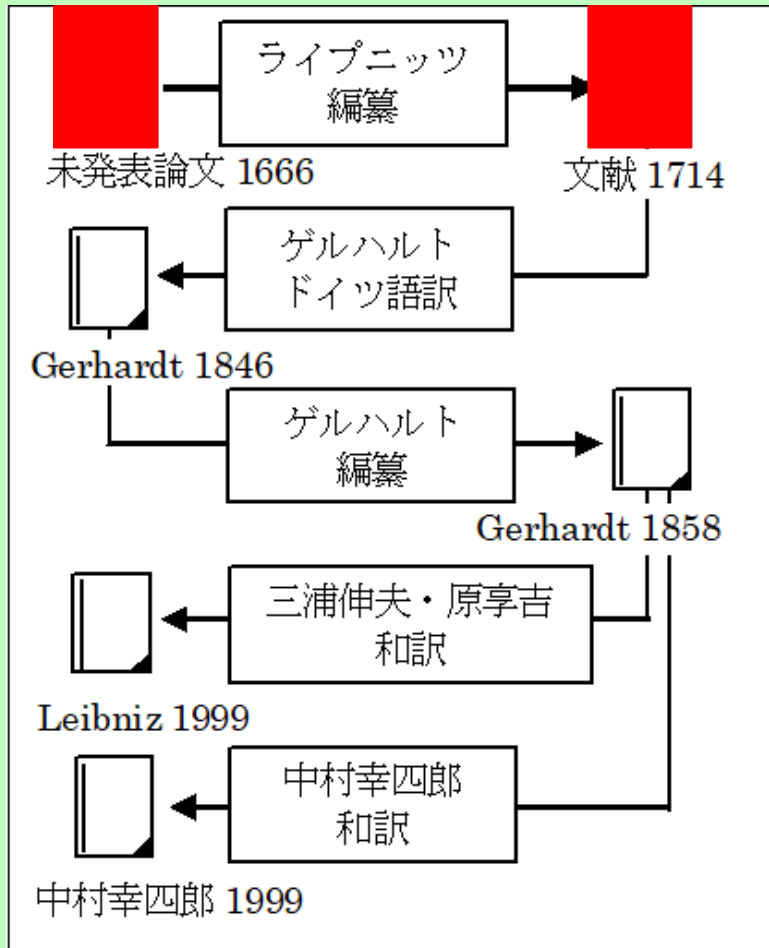
「近世数学の歴史」

3 「ライプニッツは J を使う前は Σ を使った」の信憑性



ライプニッツの学位論文

1714末～1716年にライプニッツが編纂した文献



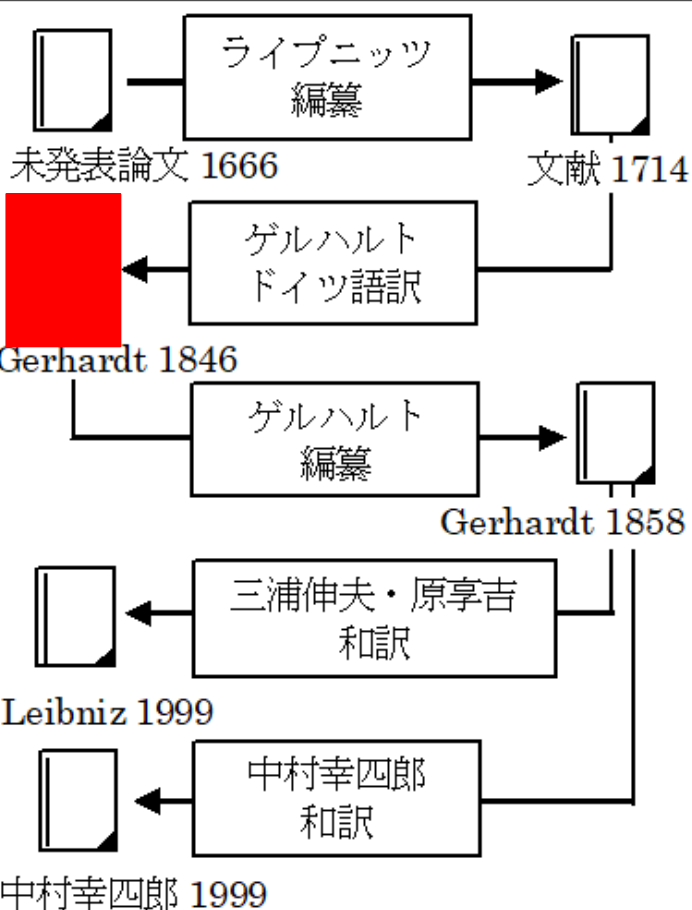
- ・ ライプニッツ著作集3(P.305)から引用
「LMG,V,392-410・・・1714年の秋ごろから執筆され、ライプニッツの死の直後の1715-16年頃に中断された断片である」
文献1714の表題は、日本名「微分算の歴史と起源」。
- ・ 近世数学の歴史(P.210)から引用
「生前未発表の論稿『微分算の歴史と起源』・・・」
文献1714も未発表である。
- ・ 近世数学の歴史(P.211)から引用
「最初の論文『組合せ論』および『歴史と起源』の中に・・・」
文献1714は、論文以降のことを再執筆したと考えられる。
- ・ 東京大学大学院数理科学研究科および東京大学理学部
2014年度冬学期に開講された「数学史」講義
<https://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~kawazumi/Nakane150106.pdf>
「微分算の歴史と起源、ニュートンとの先取権論争に対するライプニッツの弁明(1846年公刊)」
ニュートンへの手紙(1846年ゲルハルトによる出版)

3 「ライプニッツは \int を使う前は Σ を使った」の信憑性



「Historia et origo calculi differentialis」

「微分算の歴史と起源」



近世数学の歴史(PP.220-221)から引用

「最初のこの手稿に取り組んだのは、ゲルハルトでありました。
... **Historia et origo calculi differentialis...**という出版物を出して
おりますが、」

Gerhardt 1846(P.6)

et summam tertiam $\int^2 x$, et summam quartam $\int^4 x$. Hinc posito
 $1 + 1 + 1 + 1 + 1 + \text{etc. esse} \Rightarrow x$ seu x esse numeros natu-
rales, quorum $dx = 1$, tunc $1 + 3 + 6 + 10 + \text{etc. fit} \Rightarrow \int x$
et $1 + 4 + 10 + 20 + \text{etc. fit} \Rightarrow \int \int x$, et $1 + 5 + 15 + 35 +$
 $\text{etc. fit} \Rightarrow \int^3 x$, et ita porro. Unde tandem fit:
 $y - \omega = dy \cdot x - ddy \int x + d^3y \int \int x - d^4y \int^3 x + \text{etc.}$

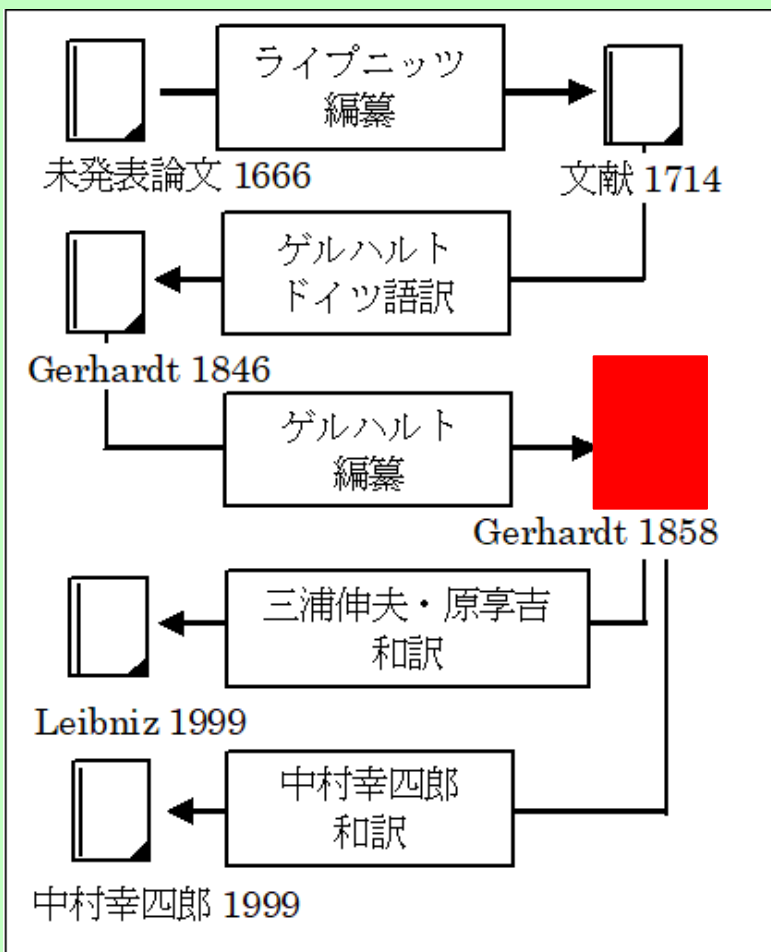
Σ の記載はない。

3 「ライプニッツは \int を使う前は Σ を使った」の信憑性



「Leibnizens mathematische Schriften」

「ライプニッツの数学著作集」



Gerhardt 1846 及びその他文献がGerhardt 1858 に掲載されている。

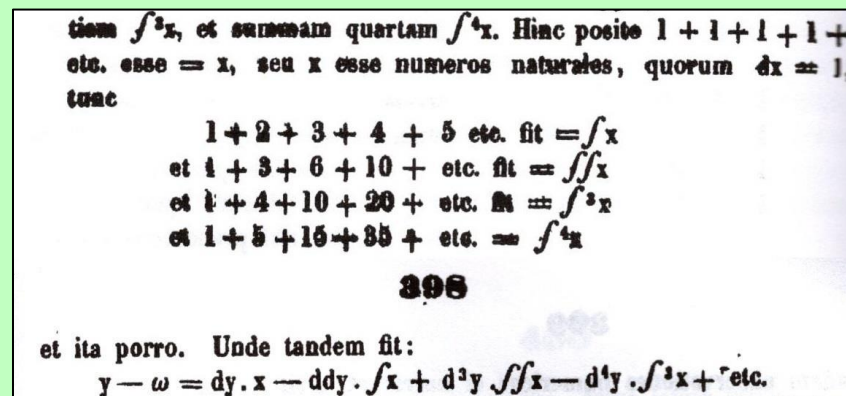
Gerhardt 1846の総ページ数50

Gerhardt 1858の総ページ数418

Gerhardt 1846のPP.1-20「微分算の歴史と起源」

⇒ Gerhardt 1858のPP.392-410

Gerhardt 1858 (PP.397-398)



Σ の記載はない。

3 「ライプニッツは ∫ を使う前は Σ を使った」の信憑性



「ライプニッツ著作集3」

ライプニッツ著作集3(P.305)から引用
「①LH,XXXV,VII;②LMG,V,392-410」「**翻訳は一応②によった上、①を照合して訳文を決定した**」と記載されている。
②LMG,V,392-410とは、ライプニッツ著作集3(P.4)に「**LMG Leibniz Mathematische Schriftrn ...**」と記載されている。
 これはGerhardt 1858 (P392-410)のことである

Libniz 1999 (PP.314-315)

d⁴yと呼んでよいであろう。そして、もう一方の数列の項をxと呼ぶならば、項の和はfx, 和の和つまり第2の和はffx, 第3の和はf³x, 第4の和はf⁴xと呼んでよいであろう。よって1+1+1+1+などが=x, つまりxは自然数で、それらのdx=1とおくならば,

1+2+ 3+ 4+5 など=fx
 1+3+ 6+10+ など=ffx
 1+4+10+20+ など=f³x
 1+5+15+35+ など=f⁴x

以下同様である。よって結局

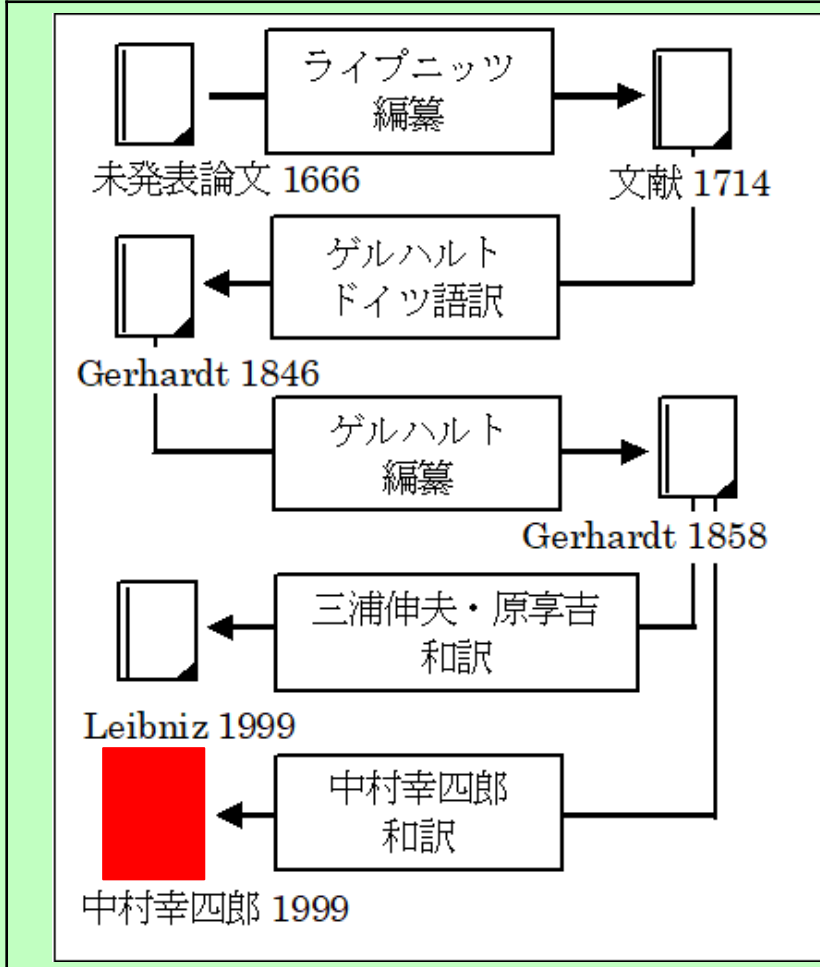
y - ω = dy · x - ddy · fx + d³y · ffx - d⁴y · f³x + など •40

Σの記載はない。

3 「ライプニッツは ∫ を使う前は ∑ を使った」の信憑性



「近世数学の歴史」



近世数学の歴史(PP.210)での引用文献の説明
 「引用、『微分算の歴史と起源』(Historia et origo calculi differentialis『数学論文集』V pp.392-418)」と記載がある。明らかにこの文献はGerhardt 1858のことである。

いま、数列 a, b, \dots, z までの項の数が x であるとき

$$1+1+\dots+1=x$$

$$1+2+3+\dots=\sum x$$

$$1+1+2+1+2+3+\dots=\sum\sum x \quad \text{等}$$

とおけば

$$a=x\cdot da-\sum x\cdot d^2a+\sum\sum x\cdot d^3a-\sum^3 x\cdot d^4a \quad (3)$$

ライプニッツは「歴史と起源」では \sum を和の記号 \int で表わし、 $\sum x$, $\sum\sum x$, $\sum^3 x$ の代りにそれぞれ

$$\int x, \quad \int\int x, \quad \int^3 x$$

を使っています。このようにするとき (3) に対応して

$$a-\omega=x\cdot da-\int x\cdot d^2a+\int\int x\cdot d^3a-\int^3 x\cdot d^4a+\text{etc.} \quad (4)$$

ここで ω は最終項の意味です。またこの等式から、容易に次の式が導かれ

3 「ライプニッツは \int を使う前は Σ を使った」の信憑性



中村幸四郎 1999(近世数学の歴史)に Σ の記載はあったが、Gerhardt 1846・Gerhardt 1858・Leibniz 1999 に Σ の記載はない。

ライプニッツが \int を使う前は Σ を使っていたと解釈するのは間違い。

ご清聴ありがとうございました。